



東方T S物語

妖夢編
2

R-18

成人向け

この本にはTSF
(異性への性転換を扱うフィクションのジャンル)が
含まれています。

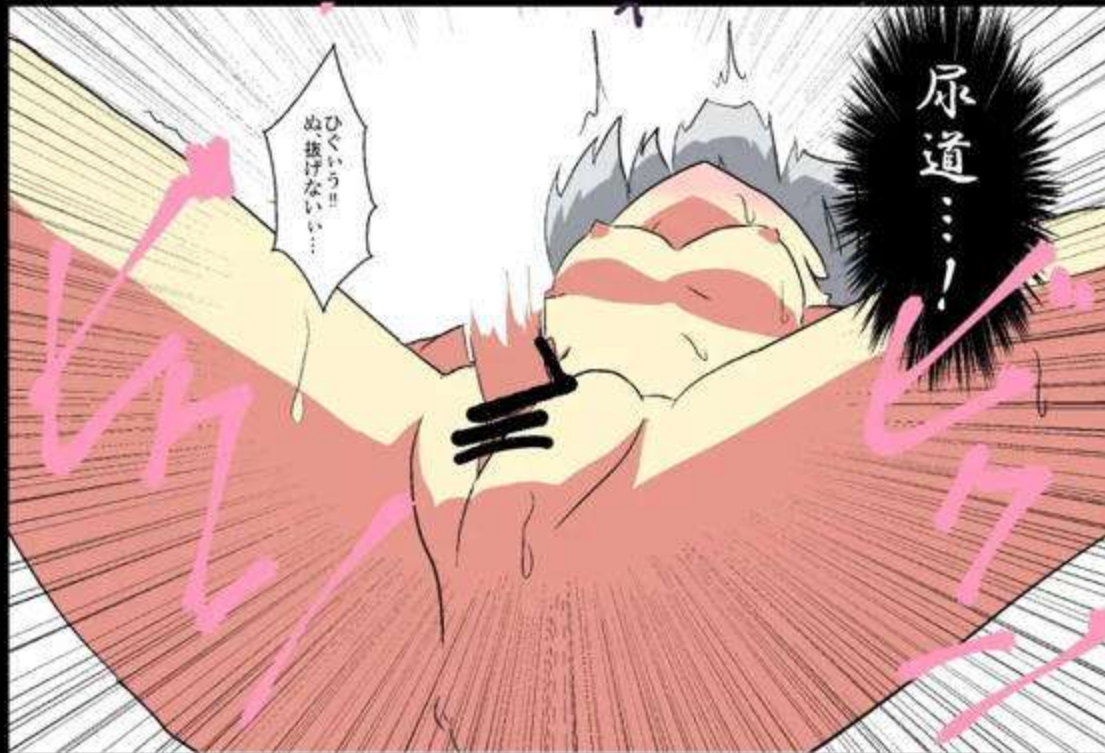
どうでもいい前書き

こんにちは三日月ネコと申します。
いつもはpixivで漫画描いてる者です。
この度、東方キャラに憑依してエッチするだけの
本を描きました。

エッチな漫画は描きなれていないので
構図とか勉強していきたいです。

三日月ネコ

前回
白玉楼までこれた男。
男がなぜこんなところまで来れるのか
それはただ偏にエロの力である。
そのエロパワーで妖夢に憑依した男。
半霊が妖夢と感覚をリンクしていることに
気が付いた男はそれを使ってオナニーに
いそしむ。



おもらしや野外でオナニーをした男は全裸のままの妖夢の身体を森に移動させ、股に竹刀を刺したまま身体を妖夢に返してあげた。鬼畜だね。

実はそのあと、男の計画は
まだ終わっていません。



「くっ、なんでこんなっ……」
妖夢はいるいるあって全裸で
股に竹刀が入った状態のまま
森のと真ん中に放置されていた。
「野良幽霊に憑依されて……」
くそっ……一生の不覚です……あっ……」
がんばって竹刀を抜こうとしているようだが
膣痙攣でも起こしているのだろうか
なかなか抜けないようだ。
「くっ……ふう……んっ……」
結構深くまで入っているのだろう。

それもそうだろう。
全て俺の仕業である。
前回、妖夢に憑依し、服を捨て
ま○こに竹刀をぶっ刺し森に行き
憑依を解いた。
しほらく妖夢は気持ちよさに
溺れていたようだか、意識を
取り戻し今必死に抜こうとしている。
というわけだ。さてと



「そこに誰かいるのか？」
「ひっ！み、見ないで！」
俺は何も知らないふりして
妖夢に近づいた。
妖夢は身体をよじって逃げようと
するが「ひくっ！」
どうやら竹刃が感じるところに
当たってしまったようだ。

「ち、痴女……」
何も知らない風に装う。
「ち、違います！ここ、これは
私のせいじゃないんです！」
知ってる。
「……どうしたんですか？」
「見ないでください……ひくっ」
ああ、泣いちゃっているよ。
「抜けなくなっただんですか？
抜きましょうか？」
「……お願いします……」

ぐりっ……
「あぐっ……もうちよつと
ゆっくり……」
「ずずずるっ……」
「ああ……んはっ」
「さあ、抜けましたよ
大丈夫ですか？」
「あ、ありが……とう……」
「助けて……だ……だ……で……では
これで……」
身体を隠し立ち去ろうとする
妖夢を俺はひきとめた。
「ちよつと待って。」
その格好で帰るの？
妖夢の足が
ぴたりと止まる。
「でも……その……服が……」
「僕にいい考えがある」
この時の僕の顔は筆舌に
尽くしがたい。いい笑顔だつたと
思う。



「僕が助けてあげますよ」
俺はそう言って妖夢の唇と重なった。

「突然のことで妖夢は何もできなかったようだ。いや、さっきまで自慰にふけていたため身体が言うことを聞かなかったのか。身体を隠していたからか。俺は今度は「妖夢」とキスをするを入れ替わる」ということをノートに書いておいた。2人の魂が口を通して入れ替わっていくのを感じた。



目を開けると俺がいた。「え…わ、私が目の前に！分身してないのに！」
向こうもきちんと俺の中に入れたようだ。
「きゃっ！なにこれ！
なんで私こんな恰好…それになんかモヤモヤする…」
「そりゃ妖夢ちゃんのこんな身体見せつけられてたんだよ？僕だって興奮するさ」
「ど、どういふこと?!」
ま、まさか、あなた…さっきの男！」

「今はその男に君がなってるんだけどね」
「ど、どういふことよ！早く戻して！」
「えー全裸で帰るの可哀そうだと
思っで、代わりに僕が帰ってあげようと思
ったのに…」
「結構です！ちよ、ちよっと
私の身体勝手に触らないで！」
「今更ちよっと胸もんだくらいで
そんな騒がなくても、
さっきはもったいないことまで
させてもらってるのにな。」
「さ、さっき竹刀を抜く時に感じて
しまつていたのだから。」
「これは俺が代わりに発散させて
あげないといけないな。」

「えい！」
「きゃっ！」
俺はいきなり妖夢を押し倒した。
ま、他人が見れば全裸の妖夢が
男を押し倒したように見えるだろうけど。
「な、なにをするんでい、やあ、あああ！」
ふふふ、やっぱりフル勃起してる
じゃないか。
「おいおい、せつかく俺が善意で
羞恥を耐えてやるうってのに
人の身体で興奮しやがって」
俺ならこの状況で興奮しないわけが
ないけどな。

「こ、これは……ち、ちちち……」
「おやおや、これを見るの初めて
なのかな？ま、自分から生えてるのは
初めてだろうね。」
「しかたねえなあ、せつかくだから
楽にしてやるよ。」
「いらない！やめて！」
「へっ！」
「ひぐっ！」
「おいおい、まだ舐めたただけだぜ
これから本番だっつのに」

じゅっぽじゅっぽ
「んっぶっ♥……」
「やめてやめて！気持ちいの！」
私の身体でチ○ポ食べないで！」
「おいおい、ノリノリじゃねーかよ。」
さっきまで嫌がってたのに、
チ○ポ震わせやがって。
じゅるじゅるじゅるるる
「なんかでりゅんか出ちゃうううー！」
「お、そろそろか？」
「イ……く……！」
「……どうびゆるるるる！どびゆるるる！」
「……！」
「おいおい、勢いありすぎだろ。」
「うっぶ……」
「ごくごく……の、飲みきれねえよ……」

「ああ……出ちゃったあ……ああ……」
「おっとまた壊れちゃったか？」
「結構もろいんだな、妖夢ちゃんは。」
「まあ、最後まで付き合っ
てもらっけどな」

「ああ……あつあ……」
さつきから回少なめになつてきたな。
おれもイキそうだし……
ラストスパートかけるか……!?
ずつぶずつぶずつぶ!

「ちよ、妖夢ちゃんから!
腰振つて! ああん♥くるとは! んっ♥」

「あは、動かないでえ……
気持ちいいのおお♥」

「おいおい! 自分から動いてうん♥
いるのに!」

「お、奥! いくうう! 妖夢ちゃんの
子宮回に届いてる! なにこれ!!」

「おおお! 気持ちいい!
でりゅ、またどびゅどびゅ出ちやうう」

「初めての感覚、チンポが身体の
入れないところに入つていくような
しびれるような感覚……」

「絞めつけないでえええ!
先っぽ噛んでりゅうう!」

「こんなエッチな身体に
なつて妖夢ちゃんの身体も
うれしいのだから。」

「キョんキョん絞めつけてしまう。」



「出して! 中に出して
妊娠させてええ!」
俺のセリフを聞いて
妖夢は腰の振りを速めた。
チンポも太くなつて痙攣して
いる。絶頂が近いのだから。
「やだあ! やめてこれ以上ううう
出ちやううう!」





いっ
ちが
いっ
ちが

中身
が
だ
い
じ
ゃ
ん

いっ
ちが
いっ
ちが

……そろそろ
妖夢ちゃんも元の身体に
戻ったのに気が付いただろう。
いや、ちよっとした
お土産を残しておいたから
『元の』身体じゃないけどね。
あんなに好きになってたんだから
きつと喜んでくれるだろう。
さて、彼女が帰ってくる前に
俺はある人と入れ替わっておこうと
思う。

そう彼女の主人とね。
ふふふ、楽しみだ。



★奥付け★
誌名:東方TS物語～妖夢編2～
サークル名:あめしよー
発行者:三日月ネコ
発行日:2012/08/30
pixivID:573106
原作:東方project(上海アリス幻楽団様)

